

見 る 知 る

じぶんの「まち」を

ミルシル



人に接するときは春のような温かさで
仕事は夏のような燃える心で
思考は秋のような澄んだ心で
己を責めるときは冬のような厳しさで

- プロフィール -

大野 稔 (おおのみのる) さん。
1944年生まれ。趣味はお出かけ、ハイキング。

仁井田地区の大野稔さんは、日頃から地域のサロンに参加したり、仲間の家にお茶を飲みに行ったり、友人と季節の草花を見に出かけたりと、人付き合いを大切にしています。そんな大野さんに、地域のつながり合いについてお話を伺いました。

しめ縄づくりの仲間とともに

お正月の玄関飾りとか、神棚のしめ縄とかあるでしょう？米が実る前の、まだ青い稲を刈り取って乾燥させておいて、それをねじり結って作るんですけどね。高根沢には元々、それらを上手に作れる人が何人もいたんですよ。今の人はお店で買うけど、昔はそれぞれの家庭で作られていたからね。私よりもずっと年上の先輩たちだけでも、そういう人たちから、作り方を教わっていたんですよ。でも、先輩たちも歳をとって亡くなる人もいて、しめ縄を作れる人も少なくなっているし、このままではこの文化もなくなってしまうなと感じたんです。それで、仁井田地区にしめ縄づくりをする仲間が何人かいたので、“仁井田シニアクラブ”というグループを作って文化や伝統を次の世代に伝える活動を始めたんです。ちなみに、地域の老人クラブが今は“シニアクラブ”と名称が変わっているので、ちょっとややこしいですけど、それとは別物です。私が定年退職してからだから、もう20年くらい経つかない。私自身は書記という立場なのですが、代表と副代表と一緒に、3人が中心となって活動を切り盛りしてやってきました。

具体的にどんなことをするかというと、まずは材料の藁（わら）を作るところから。藁といっても、

稲刈りをした後の黄色いのではなくてね。神様に捧げるものだから、青刈りといって、まだ7月の青々とした葉と茎だけの状態のものを刈り取ってしまうわけです。それをよく乾燥させてとっておいて、秋冬になると結って形を作る。青刈りする分の稲は農家さんに頼んで育ててもらっただけけれども、こうして実際に形にするまでには、半年以上前から準備をしているってことなんですよ。それでね、実際のものづくりの部分ですけど、9月の十五夜には“ぼうじぼ”づくり、12月に玄関飾りとしめ縄づくりがあります。体験教室を企画する町の生涯学習課や、NPO法人次世代たかねざわ、町内の各小学校などから頼まれて、イベントで講師となって作り方を教えます。

私たちはこうやって、しめ縄などのものづくりを通して地域の文化を伝えているわけですけども、それって、単に作り方を教えているだけではないんですよ。ちょっと大きな話になりますけど、人生って「出会い」だと思っんです。それは人との出会いだけではなくて、文化や伝統との出会いでもある。そして、そこには必ず、それを伝えてきた人たちの「地域のつながり」があるんです。文化・伝統を守ることによって地域は活性化していきますが、そこで得る「仲間」こそ、本当の宝物だと私は思っています。

元気の秘訣



地域の行事に行ってみよう。近所に顔見知りが増えると、いざという時に頼りになる！



仲間を持とう。一人でもできるけど、皆でやるともっと楽しい！

子どもたちが「ぼうじぼ」を体験

秋といえば、十五夜と十三夜のお月見ですが、皆さんは「ぼうじぼ」をご存じですか？高根沢町の年配の方には、子どもの頃を懐かしむ方も多いのではないでしょうか。ぼうじぼとは栃木県内の各所にみられる風習で、藁（わら）を編んで作る棒のことを指します。お月見の夜、子どもたちが集落の家々を廻り、「ぼうじぼあたれ、ぼうじぼあたれ、三角畑にソバあたれ」と歌いながらこのぼうじぼを地面に叩きつけるのです。これには、畑のモグラを退治するためとか、秋の収穫を祝い来年の豊作を願うためとか、色々な由来があります。とにもかくにも、子どもたちは他家でこの縁起の良い“おまじない”をすることによって、お駄賃としてそれぞれの家の大人たちから、お菓子や果物、お小遣いなどを貰えるのです。ハロウィンみたいで、楽しそうですね？けれども、残念ながら令和の時代においては、ここ高根沢町で実際にぼうじぼが行われている地域はありません。昔は子どもたちが自分の手で作っていたぼうじぼですが、今では作り方はおろか、見たこともないという人のなんと多いこと！そこで、昔を今に伝えようと、ぼうじぼ体験ができるイベントが開催されています。



「こどもたちの十五夜～ぼうじぼ作りとお宿めぐり～」と題されるこのイベントは、児童館や学童クラブを運営するNPO法人次世代たかねざわが主催し、地域の文化や伝統を伝える活動をする住民グループ“仁井田シニアクラブ”のメンバーが講師をしています。9月の土曜日の昼下がり、仁井田地区の

集会所に小学生の子どもたちが集まってきます。そして、子どもたちにとって、実の祖父よりもっと“おじいちゃん”という年代の講師に教わりながら、藁を力いっぱいねじり結って自分だけのぼうじぼを作ります。それから、十五夜のお供え物の由来を聞きながら、皆でお月見団子のおやつタイム。真っ白でふかふかのお団子に、白砂糖をかけていただきます。昔は、こうやってお団子を食べたのですって！そして最後に、ぼうじぼを持って“お宿”を廻ります。お宿を引き受けてくれるのは、集会所周辺の3軒のお宅。子どもたちがぼうじぼで豊作のお祈りをする時、お礼にお菓子を配ってくれます。



本来は夜間の行事であるぼうじぼ。昼に行くこのイベントはあくまで“体験”ではありますが、昔ながらの風習を実践した子どもたちには、日本の風土を感じ地域の大人たちと交流することで、これからの世界がほんのちょっと違って見えるかもしれません。

